

③ やったぞ” なべっこ遠足”

(きりたんぼ)

ようやく涼しい秋を迎え、秋田の美味しいお米で作った「きりたんぼ」を皆で食べようと、昨年10月20日に「なべっこ遠足」を計画していました。

前年は無念の雨でお流れになっていましたが、今回の行事は会員皆の願いが届いたようで、無事開催できました。くもり空ではあったものの楽しくお酒も飲みました。

前日に役員は下ごしらえをして準備をし、更に秋田のいぶりがっこ等の物産の販売品も並べ準備万端、満面の笑みで臨みました。参加者は来賓9名を含む55名です。



当日は、会員皆さんの秋田なまの広場に響き、ここは秋田かと感うぐらいの楽しさでした。次はもっと青空の下で美味しい「なべっこ遠足」にしたいです。

秋田県の話題

① 冬眠しない熊

秋田県などでは一昨年前頃から、雪深い厳冬期も冬眠せずに出没し続けるクマが増えている。専門家によると、冬眠は餌の枯渇期に体力を温存するため、餌があれば必要ない。この餌は実は人の生活圏に放置されるものが多い。冬眠しないクマは、実は人間が生み出しているようです。

◇目撃件数665倍の月も 積雪が腰まで達する福島県喜多方市で昨年12月、民家の居間で菓子を食べ散らかし、こたつに頭を入れて横たわるクマを帰宅した住人が発見。秋田県五城目町では今年1月、別々の民家の柿の木に登るクマが3日連続で目撃され、秋田市でも市街地の道路を横切るクマが連続目撃されている。



ツキノワグマは個体差があるが11月下旬から翌年4月ごろまでが冬眠期。「山に木の实など食べ物がなくなり体力を温存するために冬眠する。雪が雪がどんなに少なくても」とクマ研究者で秋田県自然保護課主査の近藤麻実さんは語る。ところが、県内では令和5年度、冬眠期の出没が激増した。

この年11〜2月の目撃件数は計698件で、それまでの一般的な状況を示す4年度までの10年平均と比較して各月は23〜75倍となった。6年度の同期間は計318件で、1月の133件は同月の10年平均に比べて単純計算ながら実に665倍に達した。

「厳冬期でも食べ物さえあれば冬眠しない。ただし、市街地では同じクマが移動するうち何人も目撃するので、出沒(目撃)件数イコール生息数なわけではない」が。

◇渋柿の味を知る

県内では5年度が転換点になったようだ。「この年はブナ、コナラ、サルナシ、ヤマブドウといった木の実などが全部凶作だった。山が凶作だと集落周辺に下りてクマにありついていていたが、5年度はそれも足りず柿を食いだした。秋田はほとんど渋柿だがクマは平気。ドングリは柿以上に渋い。一度うまい思いをして次々に柿をあさるようになった」

冬眠期の出没傾向に関する見解として、5年度はほぼ県北、6年度は県央まで広がったとし、5年度は親子連れや親とはぐれた子グマが多かったが、6年度はほとんどが成獣だったようだ。枝先に残る柿、堆肥にするため地面に盛り上げた米ぬかなどが餌になり、内容物が付着したまま軒下などに保管する空き缶・びんもおいを嗅ぎつけてなめにくるという。

◇餌となる食べ物の管理を 西日本では以前からクマが柿を餌にしており、島根県などでは対策として木の幹にトタンを胴巻きしてクマが滑って登れないようにしている。



人口減と高齢化などで実を収穫せず放置される柿やクリの木が増えた。クマを寄せ付けないよう伐採や胴巻きを県として呼びかけ続け、5年度以降の出没急増で対策する家が増えている。捕獲などもされることで、冬眠しないクマが人の生活圏に定着することはないとは思うが、クマに冬は寝てもらうため、私たちは餌になるものを適切に管理することが大切だとあらためて考える必要がある。

② 大寒は大雪

夏の異常な暑さと裏腹に今冬は昨年を超える大雪の1月でした。2月に入り大雪のピークは超えたものの、強い冬の気圧配置の影響で積雪は増えています。秋田市では一斉除雪が行われ、400台以上の除雪車が作業にあたりました。